

The Myth of the Land and Crevecoeur's Vision of Self in Letters from an American Farmer

Takahashi Tsutomu
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/1355915>

出版情報：英語英文学論叢. 40, pp.19-34, 1990-02. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

大地の神話と農夫の復権——

*Letters from an American Farmer*における

農夫の主体性について*

高橋 勤

J. Hector St. John de Crèvecoeur (1735-1813) が、1782年に発表した *Letters from an American Farmer* (以下 *Letters* と略) は、その文学的、歴史学的価値にもかかわらず、従来わが国では顧みられることが少なかった。¹ クレヴクールは18世紀のアメリカを知るうえで貴重な文献であるばかりでなく、文学的な価値においても19世紀に花開くアメリカ・ロマン主義文学に連なる作品であり、さらに研究される必要があると思われる。

Letters は、アメリカの農夫 James がイギリスの知人に宛てた手紙という書簡体形式で語られる。「手紙一」から「手紙三」には、アメリカの田園生活や農夫の理想が感情豊かに描かれ、「手紙四」から「手紙九」には Nantucket や Charles Town の描写が哲学的な思索を混じえて描かれる。さらに「手紙十」では克明な自然描写が、「手紙十一」では植物学者 John Bertram を訪れたロシア人の挿話が、そして最終章の「手紙十二」では独立戦争に巻き込まれた農夫の苦悩が描かれている。作品を通してクレヴクールは、新世界であるアメリカ社会の意味を問いかけ、アメリカ人の理想像を物語る。作品を理解するうえで重要な鍵となるクレヴクールの生涯について、ここで簡単に紹

* 本稿は、日本アメリカ文学会第28回全国大会(1989年10月21日 岡山大学)で口頭発表したものに加筆修正したものである。

1 日本におけるクレヴクールの研究は、1982年、*Letters* の本邦初訳が秋山健、後藤昭次の両氏によりなされ、『アメリカ古典文庫2』(研究社)に収められているほか、秋山健「クレヴクールのアメリカ文化論—アメリカの夢とその挫折」『英語研究』(研究社)第61巻第9号、同「クレヴクール『あるアメリカの農夫からの手紙』の意味」『英語文学世界』(英潮社)第9巻第12号、渡辺利雄「Crèvecoeurのジレンマ—アメリカの夢と現実」『英語青年』(研究社)第119巻第12号(1974)、同「アメリカの夢と現実」『アメリカ古典文庫2—クレヴクール』(研究社 1982)があるばかりである。

介しておこう。

Michel-Guillaume Jean de Crèvecoeur は1735年、フランス、Normandy の Caen という町に生まれている。イギリスで教育を受け、1754年、フランス軍の少尉としてカナダで従軍する。その間、ケベック攻防戦で負傷し、1759年、謎の失踪を遂げている。この失踪の意味合いが、クレヴクールの後的人生との兼ね合いでしばしば問題とされてきた。1765年、ニューヨーク州の住民権を取得、John Hector St. John de Crèvecoeur と改名する。4年後の1769年、ニューヨークの商人の娘 Mehitable Tippet と結婚、Orange County に農場用地を買い、文字どおり「アメリカの農夫」となる。Pine Hill と名付けられたこの農場での平穏で、幸福な生活が *Letters* に描かれることとなる。しかし、この幸福な生活も長くは続かず、独立戦争のあおりを受けて農場は襲撃の危機に曝される。その際、クレヴクールは妻と二人の子供を置き去りにし、長男の Ally だけを伴ってニューヨーク市に脱出する。カナダにおける謎の失踪とこの家族からの逃走が、クレヴクールの生涯に一つの暗い影を落とすこととなる。ニューヨーク市ではさらに、英国王派からスパイ容疑を受け、三ヵ月間投獄される。1780年、Ally を連れてようやくイギリスに渡り、*Letters* の原稿をロンドンの出版社に売り渡し、その金で故郷のフランスに帰還している。三年後の1783年、クレヴクールはフランス領事としてアメリカに舞い戻るが、時すでに遅く彼の農場はインディアンの襲撃に焼失し、妻は殺害され、子供達はボストンのとある家庭に引き取られていた。傷心を抱いたクレヴクールは、その後領事としてフランスーアメリカ間の定期航路の開設や農業技術の促進に尽力する。しかし、フランス革命の勃発とともに職を辞しフランスに戻るのだが、その生活も革命に続く恐怖政治、長男の急死、ミュンヘンにおけるオーストリア軍の侵攻と、安住できる月日ではなかった。そして1813年、クレヴクールは心臓発作により78才の生涯を閉じている。Crèvecoeur という名が象徴的に示すとおり、まさに「傷心」(crèvecoeur)の人生だった。クレヴクールの作品には *Letters* のほかに、フランスで書かれた *Voyage dans la haute Pennsylvanie et dans l'état de New York* (1801)、そしてクレヴクールの死後編集された *Sketches of Eighteenth Century America* (1925) がある。

1782年における *Letters* の出版が、イギリスやフランスにおいて大きな反響を呼び、独立直後のアメリカ観に偉大な影響を与えたのは容易に想像され

る。²クレヴクールはヨーロッパ社会に対してアメリカ社会の優位を説き、都市には田園を、貴族階級には農夫を対比させて、アメリカにおける理想的な田園社会を描こうとしたのである。クレヴクールが理想化したアメリカは、ロマン派精神が萌芽していたヨーロッパで新たな大地の神話を創り出したようだ。フランスでは、de Saint-PierreやChateaubriandがアメリカの大自然に対する憧憬を強めたし、³イギリスではHazlitt, Southey, Coleridgeがクレヴクールの描いた新世界に心酔した。⁴二十世紀に入ると、クレヴクール批評は大地の神話を受け継ぎながら、一方でアメリカの理想と現実、自然の豊かさと破壊性、自由と奴隷制という二重の観点から論じられてきた。大地の神話を強調した批評家には、D. H. Lawrence, Henry Nash Smith, Leo Marxがあり、⁵自然の破壊性や奴隷制というアメリカの現実的な側面を強調した批評家には、Marius Bewley, Thomas Philbrick, 渡辺利雄が、⁶さらにアメリカの理想と現実を対比的に捉えたものには、Russel Nye, James Mohr, Elayne Rappingなどの論文が上げられる。⁷

2 Howard Riceの調査によると、クレヴクールの*Letters*が1785年から95年にかけて、ヨーロッパにおけるアメリカについての重要な資料だったことがわかる。Howard C. Rice, "Some Notes . . . on the American Farmer's Letters," *Colophon* pt. XIX No. 3 (1934).

3 Thomas Philbrick, *St. John de Crèvecoeur*, (New York : Twayne Publishers, Inc., 1970), p. 161.

4 Ibid., p. 162.

5 D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature*, (New York : Penguin Books, 1961), pp. 28—39. Henry Nash Smith, *Virgin Land : The American West as Symbol and Myth*, (Cambridge : Harvard University Press, 1950), pp. 121—125. Leo Marx, *The Machine in the Garden : The Technology and the Pastoral Ideal in America*, (New York : Oxford University Press, 1964), pp. 107—18.

6 Marius Bewley, *The Eccentric Design : Form in the Classic American Novel*, (New York : Columbia University Press, 1959), pp. 102—6. 渡辺利雄『アメリカ古典文庫2—クレヴクール』(研究社, 1982)「解説」5—34ページ。

7 Russel B. Nye, "Michel-Guillaume St. Jean de Crèvecoeur : *Letters from an American Farmer*," in Henning Cohen, ed., *Landmarks of American Writing*, (New York : Basic Books, 1969), pp. 35—50. James C. Mohr, "Calculated Disillusionment : Crèvecoeur's *Letters* Reconsidered," *South Atlantic Quarterly* 69 (1970), pp. 354—63. Elayne A. Rapping, "Theory and Experience in Crèvecoeur's America," *American Quarterly* XIX (1967), pp. 707—18.

こうしてみると、*Letters* の批評は大地の神話をめぐるアメリカの「理想と現実」の間を揺れ動き、アメリカの農夫の役割については顧みられることが少なかったように思われる。すなわち従来⁸の批評では、アメリカの大地の神話とクレヴクール⁹の環境決定論的な見解が強調され、農夫の主体性があまりに過小評価されてきたのである。この小論の目的は、批評の視点をアメリカの大地から農夫に移し、主体としての農夫の姿を浮き彫りにしながら、その「再生」と「墮落」の現実を考察することである。

I

Henry Nash Smith は、*Virgin Land* の第三部 “Garden of the World” の冒頭に *Letters* から次の一節を引用している。⁸

Here Nature opens her broad lap to receive the perpetual accession of new comers and to supply them with food. I am sure I cannot be called a partial American when I say that the spectacle afforded by these pleasing scenes must be more entertaining and more philosophical than that which arises from beholding the musty ruins of Rome. (42-3) ⁹

スミスは大地の神話を強調するためにこの一節を引用したのだが、多くの読者もまたクレヴクールの作品を理解するうえで、この一節に大きく左右されたのではないだろうか。自然と文明の対比、自然の豊かさと美しさ、そして人々を思索に誘い込む自然。読者がそこに見たものは、平穏で豊かなルソーの自然であり、人間を包み込む「母なる大地」の神話だったのだ。さらに、Leo Marx は *Letters* に描かれたアメリカに「典型的な牧歌的情況」を見出し、この「^{ステイック}静的」な空間において大地が新たな人間を形作るという。¹⁰ 確かに、クレヴクールは *Letters* のなかでモンテスキュー流の環境決定説を繰り

8 Smith, p. 121.

9 J. Hector St. John de Crèvecoeur, *Letters from an American Farmer and Sketches of 18th-Century America*, (New York : Penguin, 1981). 以下 *Letters* に関するカッコ内のページ数はこの版によるものである。

10 Marx, pp. 108-114.

返している。彼によれば、「人間は草木のようなもの」(71)であり、アメリカに到着したヨーロッパの移民にとってアメリカは「偉大な療養地」(68)であり「避難所」(37)なのだ。

一方、クレヴクールが現実的な目で捉えたアメリカの自然は、決してルソー的な調和した自然ではなかった。それは、破壊的なホブスの自然観に近いものだったのである。ホブスは *Leviathan* の中で自然を法の無い戦争状態と定義するが、¹¹クレヴクールが捉えたアメリカの自然も弱肉強食という力関係に左右される世界だったのだ。死闘するヘビ、野性を剥き出すハチドリ、ツバメの巣を横取りするミソサザイ、家畜を狙う熊、キツネ、オオカミ。“Nature opens her broad lap”と理想化された自然は、逆に人間の存在を脅かす破壊的な自然となり“surrounding hostility”(76)と描き直されるのである。さらに、クレヴクールは荒野に住む猟師の生活を描きながら、自然状態にある人間の姿を「肉食獣以上のものではない」(72)と言い、「しばしば完全な戦争状態にある」(72)と人間性の墮落を指摘する。こうして見る限り、アメリカにおいては自然が主体であり、農夫は自然と同化して「再生」し、あるいは「墮落」する。¹²すなわち、農夫は自然の隠喩的表現と化しており、農夫の「再生」は自然の調和した側面を、農夫の「墮落」は自然の破壊的側面を表現しているのだ。この自然を中心とした「再生」と「墮落」のパターンは、*Letters*のなかでアメリカとヨーロッパ、田園と荒野(あるいは都市)、NantucketとCharles Townという二重性の変奏を作り上げ、読者はアメリカの理想と現実という引き裂かれた視点からこの作品を論じることになる。少なくとも従来への批評は、こうした視点から論じられてきた。

しかし、果たしてそうだろうか。クレヴクールは自然環境の、農夫に対する一方的な力を強調していただけなのか。農夫と自然の関係は、草木のイメージであらわされるような「^{ステイック}静的」なものだったのか。そして、農夫は自然と同化した隠喩的な表現にすぎなかったのだろうか。クレヴクールは、アメ

11 Thomas Hobbes, *Leviathan*, 永井道雄, 宗片邦義訳『世界の名著—ホブス』中央公論社, 1971, 156ページ。

12 クレヴクールは、アメリカが「墮落」の地であるという見方がフランスに根強く残っていることを十分承知していた。J. A. Leo Lemay, *The Frontiersman from Lout to Hero: Notes on the Significance of the Comparative Method and the Stage Theory in Early American Literature and Culture* (Worcester, MA: American Antiquarian Society, 1979), p.209.

リカの自然についてこう述べている。

If our soil is not remarkable as yet for the excellence of its fruits, this exuberance is, however, a strong proof of fertility, which wants nothing but the progressive knowledge acquired by time to amend and to correct. (46)

アメリカの自然の本質はその粗野な“exuberance”にあり、それは農夫の“progressive knowledge”によって矯正されなければならない性質のものであった。アメリカの自然の豊かさは、農夫にとって価値の曖昧さを秘めており、自然を律する農夫の主体性こそ強調されなければならなかったのだ。さらにクレヴクールは牛の飼育に触れて、自然を律する法則をこう説いている。「私たちにとって法とは、ちょうど牛小屋における私の存在のようなものである。つまり、無謀で貪欲なものが弱者や臆病なものを虐げないようにする轡であり、鞭のひと打ちなのである。」(57) クレヴクールにとって「法」とは、自然の破壊性と過剰な豊かさを律する人間の意識的な努力なのであり、それは人間の本性を抑制する理性の力でもあったのだ。Lettersに描かれた農夫と自然の関係は、マークスが言うように「静的」な^{ステイティック}なものではなく、「活動的」な^{ダイナミック}な相互関係だったのである。Lettersと同時期に書かれた*Sketches of Eighteenth Century America*には、農夫と自然のダイナミックな関係を示す次のような一節がある。「このように、ひとつの悪はもうひとつの悪によって均衡が保たれ、自然の反乱は、他の要素の力によって制圧される。この偉大な、驚くべき均衡のなかで、人間は闘争し生きているのだ。」¹³

自然を流動的な世界と見るクレヴクールにとって、農夫が自然と平衡状態を築き上げる過程こそ大きな意味をもつものではなかったか。Lettersの中には“change”, “transition”, “progress”, “success”, “metamorphosis”という言葉が多用されている。アメリカの農夫にとって人生は一つのプロセスであり、「再生」する望みと同時に「墮落」する誘惑に絶えず脅かされていた。そうすると、農夫が自己の規律をもって大地を「耕作する」(cultivate)ということは、隠喩的な意味合いを持ちはしなかっただろうか。周知の通り、「cultivate」という語は語源において“culture”と同じであり、「(大地を)耕

13 Crèveœur, p. 300.

す」という意味とともに「文化を創る」ことを意味している。それは、文字どおり、荒野を開拓し「中間農耕地区」(middle settlement)を築く過程でもあり、道徳的な意味においては、人間の内なる自然を克服し、心の平静と秩序ある生活を培うということの意味したのである。クレヴクールは *Letters* の中で“we are a race of cultivators” (43), “we are a people of cultivators” (67) とアメリカの農夫を理想化し、さらに農耕することの道徳的な意味について、「大地を耕すという単純な行為が彼ら（アメリカ人）を浄化する」(71) と言い、さらに農耕と精神的な思索を結びつけていた。一方、荒野で墮落した農夫については、「私たちの悪い仲間、半ば耕作者であり、半ばハンターである」(77-8) と非難している。

ヨーロッパの移民がアメリカの大地を「耕作」し、“cultivator”（農夫＝文化の担い手）となる過程は、同時にアメリカ人となる過程でもあったのである。*Letters* の三章において「アメリカ人とは何者か、この新しい人間は」という問いに問われるアメリカ人の本質は、文字どおり「アメリカ人であること」ではなく「アメリカ人になること」であり、それはヨーロッパの移民が、社会に抑圧された生活から、より自由な、そしてより人間的な生を希求する過程でもあったのだ。「アメリカ人になる」ということは、人生の再生を意味する隠喩となり、自由と独立を鼓舞する修辭でもあったのである。

II

クレヴクールはアメリカにおける農夫の「再生」について、土地の肥沃さ以上に農夫の道徳性を繰り返し強調していた。農夫のアメリカにおける成功は、その「真面目さ」(sobriety), 「正直さ」(honesty), そして「勤勉さ」(industry) に大きく依存していたのである。なかでも“industry”という語は、*Letters* のなかに頻繁に使用され、“industrious”という形容詞と合わせると、三章の中だけでも37回と、ほぼ全ページに渡って繰り返されているのである。また“sobriety”, “honesty”, “industry”という三語は慣用句のように繰り返され、三章の中だけでも“sober and laborious” (75), “sober and industrious” (81), “the sober, the honest, the industrious” (84), “sobriety, rigid persimony, and the most pervading industry” (84), “sober, honest, industrious” (89), “honest, sober, industrious” (89), “sobriety, honesty, and emigration” (90), “sobriety, honesty, and industry” (91),

“sober man, . . . laborious and honest” (96), “honesty, sobriety, and gratitude” (100), “his honesty . . . his industry” (102), “sobriety and industry” (105)と用いられている。クレヴクールに言わせれば、「移民のだれもが成功する訳ではない。真面目で、正直で、勤勉なものだけだ。」(84)

従来、環境決定論的な立場から論じられてきた農夫と猟師、ナンタケットとチャールズタウンの対比も、農夫の特性である“sobriety”, “honesty”, “industry”という観点から見直すと、その対照が一層鮮明なものとなる。まず、この三語の定義を深めると“sober”という語は「真面目」, 「シラフ」という日本語には置き換えられない意味の広さがあるように思われる。*OED*には第一項に“Moderate, temperate, avoiding excess, in respect of the use of food and drink”と、第十項には“Free from extravagance or excess”という定義もあり「節制」という意味が強調されているし、*The Random House Dictionary*には“showing self-control”という定義もみられる。つまり、“sober”であるということは、自制心があり、穏健で、落ち着いた、という意味合いも含んでいるのである。クレヴクールは*Letters*の中で“sobriety”という語を“drunkenness”, “excess”, “dissipation”と明らかに対比させて捉えているし、“honesty”は“fraud”, “injustice”と、そして“industry”は“idleness”, “sloth”という言葉と対比して用いている。この観点から農夫と猟師の生活を対比すると、猟師の生活は狩猟と“idleness of repose” (78)に分かれ、その家族も“sloth and inactivity” (77)に冒されていた。さらに猟師は“indulgence of inebriation” (78)に浸り、「彼らはインディアンと酒に酔い、奴等からいつも騙し取る」(79)と退廃した様子を見せていたのである。同じ辺境にありながら *Quakers* や *Moravians* の生活は、その道徳性と集団の規律により秩序付けられており、猟師の生活と好対照をなしていたのである。

この道徳性を基盤とした「再生」と「墮落」のパターンは、ナンタケットとチャールズタウンの対比にも見られるのである。ナンタケットは大西洋に浮かぶ砂地の小島である。しかし、この島には不毛な土壌にもかかわらず、調和した社会が築かれていた。クレヴクールはナンタケットの章の冒頭で、アメリカについての記述の多くが、従来、自然や地理上の描写に集中してきたことを指摘し、住民の才能や力が見逃されてきたと前置きする。そして、その住民の実直な性格と勤勉さによって築かれたのがナンタケットの社会なのだと言う。

... though it is barren in its soil, insignificant in its extent, inconvenient in its situation, deprived of materials for building, *it seems to have been inhabited merely to prove what mankind can do when happily governed!* Here I can point out to you exertions of the most successful industry, instances of native sagacity unassisted by science, the happy fruits of a well-directed perseverance. (*italics mine*, 107)

Philbrick は“happily governed”という語句を社会の法に言及したものと解しているが、¹⁴同時にこれは自己の法に言及したものと取れないだろうか。“industry”, “sagacity”, “perseverance”という自己の規律に関する語句が次に続いているし、不毛の地を調和した社会に創り変えた背景には住民の規律ある生活が基盤となっていたはずである。前にも見たとおり、自然と人間の関係が極めて流動的なものとして捉えられ、農夫の生活が「墮落」の恐怖に曝される時、人生の成功と幸福は、自己をいかに規制するかということにかかっていたのである。クレヴクールはナンタケットの住民の勤勉さを“vigorous industry” (108), “active industry” (108)と繰り返し、「この島において注目値するのは、その住民だけだ」(110)と断言する。さらに、ナンタケットの住民は“frugal, sober” (128)であり、子供の教育にも“sober, industrious, just, and merciful” (128)であることが強調されている。こうしてこの不毛の島は調和した社会を築き上げ、社会悪である奴隷制も見られなかった。*Letters*の前半でアメリカを移民のための「療養地」と捉えたクレヴクールは、ここにきて大地と農夫の役割をこう逆転させている。「ここでは逆に人間の勤勉さが、その力を発揮する限りない大地を手にいれているのだ」(165)と。

一方、チャールズタウンの住人は、ナンタケットの住人と際立った対照をなしていた。“sobriety”という言葉が含蓄する「シラフ」、「節制」、「真面目」という意味とは対照的に、チャールズタウンの住人は「アメリカでもっとも陽気 (“gayest”)(166)であり、「放蕩と快楽」(167)に強く惹かれていた。この町に見られる奴隷制は、アフリカの住民の人権を踏み躪る“frauds”でしかなく、さらに農業が農園主と奴隷に階層化されたこの社会では、“industry”

14 Philbrick, p. 51.

という概念も成り立たなかったのである。農園主は搾取することによって安逸な生活を送り、奴隷に課された苛酷な労働は“toil”であり“labour”でしかなかったのだ。この自己の規律のない社会では人間性は墮落し、クレヴクールは再び、「人間は自然同様、戦争状態にある」(174)とホップズ的な世界観を強調する。不毛な地で再生したナンタケットの住人と、肥沃な地で墮落したチャールズタウンの住人と、両者の運命を決定的に分けたのはその道徳性に他ならなかったのだ。

クレヴクールが *Letters* の中で繰り返す“sobriety”, “honesty”, “industry” という農夫の原則は、Benjamin Franklin が自伝の中で強調する自己の規律と酷似していた。ロレンスは、フランクリンの合理主義をクレヴクールにおける情緒性の対極として捉えているが、¹⁵ アメリカの「成功の物語」という観点からすると、両者の間には多くの類似点が見られるのである。¹⁶ フランクリンの自伝の「私が生まれ育った貧しさと無名の地位から脱け出し、裕福さとこの世でそれ相当の名を得るまで……」¹⁷ という有名な立身出世の書き出しは、クレヴクールによる Andrew の物語の冒頭、「私がここで描きたいのは、貧しいものが進歩していく過程であり、貧窮から余裕へ、抑圧から自由へ、無名と軽視から相当の地位へと向上する段階である」(90) と酷似していた。さらにクレヴクールはこう続けている。「それは稀なる好運によるものばかりではなく、真面目さ (“sobriety”) と、正直さ (“honesty”) と、移住が徐々に実行されて行なわれるものなのだ」と。若きフランクリンがパンを小脇に抱えてフィラデルフィアに到着する様子は、アンドリューが

15 Lawrence, p. 29.

16 クレヴクールとフランクリンの関係はよく知られている。クレヴクールは *Sketches of Eighteenth Century America* の中で、“Among the many useful citizens thou [Pennsylvania] hast already produced, Benjamin Franklin is one of the most eminent of thy sons” (Crèvecoeur, p. 300) と描いているし、フランクリンは友人に宛てた書簡の中でクレヴクールの *Letters* が信頼のできるアメリカの記述であると言っている (Benjamin Franklin, *Writings*, The Library of America, 1987, p. 1083)。しかし、*Letters* とフランクリンの *Autobiography* の具体的な比較は未だなされておらず、唯一 Philip D. Beidler が自伝とアメリカの時代精神という観点から両作品を論じているに過ぎない。Philip D. Beidler, “Franklin’s and Crèvecoeur’s ‘Literary Americans.’” *Early American Literature* XIII (1978), pp. 50–63.

17 Benjamin Franklin, *Benjamin Franklin’s Autobiography*, eds. J. A. Leo Lemay and P. M. Zall, (New York : Norton, 1986) , p. 1.

言葉も通じぬまま同じフィラデルフィアの港に降り立つ光景と重なり合うし、フランクリンが知り合いの紹介で印刷所に奉公する経緯は、アンドリューがジェームズの紹介で農場に働きにでる姿を思い起させる。アンドリューは持ち前の「真面目さ」と「正直さ」と「勤勉さ」で自作農へと成長するし、フランクリンもまた「真面目」(“sober”)であることの大切さを強調し、「勤勉」ということについても「実際に勤勉であり儉約することを心掛けたし、その反対だと外見上見られないようにも注意した」¹⁸と徹底していた。さらにクレヴクールはヨーロッパの移民を国籍別に比較し、スコットランド人は「儉約家で働き者」(85)だが妻がドイツ人ほど働き者でないといい、アイルランド人が成功しない理由としては、「酒好きで喧嘩好き」(85)ということ挙げている。一方、フランクリンも成功する資質を同じ様な規範に求めているのである。フランクリンは Keimer の印刷所に勤める三人の職工を評して、Hugh Meredith は「酒好き」であり、Stephen Potts は「多少怠け者」だと、そして George Webb は「怠け者で、思慮が浅く、極めて分別に欠ける」といい、成功するための道徳に欠けるとしている。¹⁹

前にも触れたとおり“sobriety”という語は「節制」という意味を含蓄し、*Letters*の中に見られる“moderation”, “temperance”, “frugality”という言葉と呼応していた。さらに、こうした自己の規律はクエーカーの道徳である“obedience to the laws, even to non-resistance, justice, good will to all, benevolence at home, sobriety, meekness, neatness, love of order, fondness and appetite for commerce” (128)とも密接に結びついていたのである。そうすると、クレヴクールが繰り返し強調する“sobriety”, “honesty”, “industry”という言葉の含蓄は、フランクリンが自伝のなかで言う人生を成功させる十三の原則, “temperance”, “silence”, “order”, “resolution”, “frugality”, “sincerity”, “justice”, “moderation”, “cleanliness”, “tranquility”, “chastity”, “humility”とも極めて似通ったものだったのである。フランクリンの自伝も、クレヴクールが語るジェームズ、アンドリュー、そしてナンタケットの住人の物語もアメリカの成功の夢を具現したものであり、その成功は“sobriety”, “honesty”, “industry”という自己の規律と努力により実現されたものである。そして、フランクリン

18 Ibid., p. 54.

19 Ibid., pp. 42–43.

の自伝とクレヴクルの *Letters* は、成功の規範を社会道徳として提示するという面においても類似していたのである。²⁰

III

これまで筆者は、アメリカにおける農夫の積極的な役割を考え、農夫と自然のダイナミックな関係を問うてきた。ここでさらに注目したいことは、農夫と自然をめぐる隠喩の逆転という事実である。批評の視点を自然から農夫に移すとき、両者を結びつける隠喩性はその方向を必然的に逆転する。前にも述べたとおり、環境決定論的な見方からすると農夫は自然の一部となり、その「再生」と「墮落」は自然の相反する二側面を表現する隠喩と化した。しかし、アメリカにおける農夫の主体性を考えると、自然は新たに隠喩性を帯びて映しだされるのである。大地を「耕作する」ことの隠喩性に見られるように、人間の内面、その精神性がアメリカの自然を通して象徴的に表現されているのである。

クレヴクルが農夫の道徳性を強調する背景には、人間性に対する深い懐疑が秘められていたように思われる。*Letters* における人間性の「墮落」や悪という問題は、従来、自然の破壊性の顕在化された形として捉えられてきた。自然の破壊性は、死闘するヘビやハチドリという具体的な描写により説明され、読者はこの弱肉強食の世界が自然の現実であり、人間性の本質なのだとして理解してきたようだ。と同時に、こうした自然の描写がクレヴクルの視点を通して描かれたものであることを忘れてしまうのだ。つまり自然を見るクレヴクルの目が、すでに悪、闘争、略奪という破壊的なイメージに強く引き付けられており、自然の描写は、そうしたクレヴクルの哲学的な思考の投影であるということを見過ごしてしまうのである。事実、*Letters* に描かれた自然の描写は、闘争、略奪というイメージに著しく偏っていた。ケベック攻防戦以来、相次ぐ戦禍に巻き込まれた作者クレヴクルにとって、認識のパラダイムは戦争や略奪という人間的な状況の体験に大きく左右されており、アメリカの自然の破壊性は、人間の悪や破壊性を映しだす隠喩的表現だったのではないだろうか。自然と農夫を結びつける隠喩は、ここに至り、自然→人間という方向性から、人間→自然という方向性へと転換する。さらに、ク

20 Beidler, p. 51.

レヴクールは自然と人間を比較してこう述べている。

... the whole economy of what we proudly call the brute creation is admirable in every circumstance ; and vain man, though adorned with the additional gift of reason, might learn from the perfection of instinct how to regulate the follies and how to temper the errors which this second gift often makes him commit. This is a subject on which I have often bestowed the most serious thoughts ; I have often blushed within myself, and been greatly astonished, when I have compared the unerring path they all follow, all just, all proper, all wise, up to the necessary degree of perfection, with the coarse, the imperfect systems of men, not merely as governors and kings, but as masters, as husbands, as fathers, as citizens. But this is a sanctuary in which an ignorant farmer must not presume to enter.
(62)

この一節に見られるように、クレヴクールが最も真剣に考えた事柄は、理性をもった人間が野獣（自然）以下に墮落し過ちを犯すという事実だったのだ。その墮落の内実が略奪や虐待であるということも、国王、領王、主人、父親、夫と人間関係の強者が例に挙げられていることから明白である。こうした哲学的な思索に強く引かれながら、クレヴクールはここで言葉を断ち、ミソサザイやスズメバチの闘争という暗示的な自然描写へと話題を転換する。すなわち、自然を通して人間の破壊性を暗示していたのである。無論クレヴクールにそうさせたのは、彼の「無知な農夫」というペルソナだったのだ。

クレヴクールは作品の後半部において、この「無知な農夫」というペルソナを脱ぎ捨て、人間の悪、破壊性という哲学的な問題に直面する。その典型的な例が、チャールズタウンにおける奴隷制だったのだ。クレヴクールは、奴隷の悲惨な現実を顧み、アフリカの村落で繰り広げられる「戦争と殺戮と強奪」に思いを馳せて、「いったい人間とは何者なのだ」(170) と懐疑の淵に絶叫する。作品の前半部において「アメリカ人とは何者か、この新しい人間は」と希望を以て語ったクレヴクールは、ここにきて人間性に対する深い幻滅を味わうのである。クレヴクールの視点は奴隷制や戦争という社会悪から、人間性に内在する悪という哲学的な思索へと移行する。「私たちは、自分の思い

描いているような存在ではない。人間には肉食獣と同様、心の中に略奪と流血への欲望が植え付けられているのだ。](174) クレヴクールが *Letters* の主題としたのはアメリカの自然ではなく、この人間中心の哲学だったのである。そして、その哲学が行き着いたものは、荒野にしる、文明化された社会にしる「いずれの場合も悪は蔓延している」(177) という黙示録的な認識だったのである。この章の結末において作者は、森の中で檻に吊された黒人奴隷の話を入する。野鳥に目を抉られ、虫やハエに全身を蔽われた奴隷という悪夢的光景は、奴隷制という悲惨な現実を捉えたものであると同時に、人間性の悪を象徴する隠喩でもあったのである。

ここで問題となるのが、自然の破壊性と人間の本性との関係である。人間性に潜む悪、それは自然の破壊性が顕在化されたものなのか、それとも人間の歪められた理性の結末なのだろうか。クレヴクールの問いを繰り返して言うならば、いったい人間とは何者だったのか。クレヴクールは確かに、人間の破壊性が自然の破壊性と通底するものと考えていた。しかし自然の破壊性は、前述の引用からもわかるように“economy”という独自の法に統制されていたのであり、それは“all just, all proper, all wise”なものだったのだ。(悪という概念さえ、自然の破壊性には当てはまらないのかもしれない。)一方、人間は「生理的な悪」と同時に「道徳的な悪」に苦しみ(227)、野獣以下に墮落する可能性を秘めていたのである。すると、農夫を墮落させたものは、自然の二元性という曖昧さではなく、人間自身が持つ理性の曖昧さだとは言えないだろうか。自然に法を与えるはずの理性が歪められ、自然はそれ自体の秩序さえ見失い、世界を混沌と化すのだ。法律家が法を歪め、奴隷の主人には、「自然の全法則も屈従しなければならず」(170)、さらに戦争は「理性が残虐行為と流血に屈した」(204)結末だったのである。「自然よ、お前はどこなのだ」(169)というクレヴクールの悲痛な叫びは、自然に対する懐疑ではなく、人間の理性に対する深い懐疑に他ならなかったのだ。

クレヴクールは *Letters* の最終章において、独立戦争に巻き込まれた農夫の苦悩を描き、農夫の無力さを嘆いている。多くの読者がアメリカの厳然たる「現実」を見た所以もここにあるのだが、農夫は決してその主体性を放棄した訳ではなかった。農夫は自らの「理性」に従い、危険に曝された農場を捨て、インディアン部落に移り住むのである。それは、失われた自然の法を回復する過程でもあったのだ。インディアンたちは「法律には支配されてはいないものの、その汚れない素朴な生活様式のなかに法が与えるすべての

ものを見出していた」(211)からだ。さらにクレヴクールは農夫の理想像を再度繰り返す。それは自然を「耕作」し、“sobriety”, “honesty”, “industry”によって人間的な秩序を築き上げる農夫の姿だったのだ。クレヴクールは「大地を耕しているかぎり、私達の誰も野蛮人になる恐れはない」(226)と言い、“industry”の教訓を繰り返し説いている。そして奴隷を解放することを心に決めた農夫は、彼らに“be sober, frugal, and industrious” (219) というアメリカの農夫の教訓を投げかけるのである。

IV

クレヴクールの *Letters* が、従来、大地の神話、田園社会の理想像という観点から論じられてきたことについては以下のような理由が上げられる。(1) Thomas More の *Utopia* (1515) 以来、楽園の夢が新大陸アメリカに投影されてきたこと、そしてさらに Captain John Smith などによるアメリカの実際の記述が、土地の肥沃さや自然の豊かさに集中し大地の神話を強調したこと、²¹(2) ロマン主義の影響により自然の意味が大きく前方に押し出されたこと、(3) モンテスキューの環境決定論がクレヴクールの作品に色濃く見られること、(4) フイジオクラシー重農主義という政治的な修辞により田園生活の理想が問われたこと。H. N. Smith や Leo Marx が試みるように、クレヴクールの作品をこうした文化的背景の中で捉えることは意義深いことだろうし、また大地の神話をめぐってアメリカの「理想と現実」が問われるのも当然のことであろう。しかし、アメリカの自然や社会に焦点がおかれ、農夫の主体性が軽視されると作品の価値が大きく見失われるのではないだろうか。クレヴクールは *Letters* において農夫の「再生」と「墮落」がその精神性に大きく依存するものであることを語り、自然を抑制し心の平静と秩序を築く主体としての農夫の姿を描こうとしたのである。そしてクレヴクールはアメリカの自然を語りながら同時に人間の精神風景を語っていたのであり、アメリカにおけるヨーロッパの移民の「再生」と「墮落」は、心の「再生」と「墮落」という

21 アメリカの地理や自然の豊かさを記述し大地の神話を強めた作品には、Captain John Smith の *A Description of New England*, George Alsop の *A Character of the Province of Maryland*, William Byrd II の *The History of the Dividing Line*, Thomas Jefferson の *Notes on the State of Virginia* などが挙げられるが、いずれもアメリカの自然の豊かさ、土地の肥沃さを強調している。

哲学的な思索と結びついていたのである。

この自然の隠喩性という点において、クレヴクールの作品はアメリカ・ロマン主義文学の先駆的な役割をなしていたように思われる。自然を通して人間の理想を語り、自然を通して人間性の悪を暗示する。自然の意味が大きく問われながら、それは常に人間の精神との相関関係によって描かれていたのである。クレヴクールの鋭敏で、感情豊かな自然への観察眼は、Thoreauの自然描写を彷彿させるし（クレヴクールは十八世紀のソローとしばしば呼ばれてきた）、アメリカ人のアイデンティティの追究という点においては、Emerson や Whitman の楽観的な愛国主義を連想させる。さらに人間性に潜む悪という問題については、Hawthorne が直面した暗黒な世界を、そして悪の問題を人間の歴史や戦争に普遍化し「世界苦」^{ヴェルトシュメルツ}を見出すクレヴクールの文学的感性は、Melville の叙事詩的想像力を想起させずにはおかない。クレヴクールの *Letters* は十八世紀のアメリカの田園社会を描いた歴史的文献としてばかりでなく、アメリカ・ロマン主義文学に連なる重要な文学的遺産として再評価されるべきではないだろうか。

The Myth of the Land and Crèvecoeur's Vision of Self in *Letters from an American Farmer*

Tsutomu Takahashi

Crèvecoeur's *Letters from an American Farmer* (1782) has been considered as an exposition of the agrarian ideal in America and discussed chiefly in relation to the myth of virgin land (Smith 1950) or to the pastoral ideal (Marx 1964). The mythical aspect of the book is reinforced further by Crèvecoeur's environmental determinism, a view that emphasizes the shaping force of American land. Consequently, the role of the American farmer has been underestimated. The present essay attempts to illustrate the active role of the farmer in the process of his economic and spiritual transformation.

Crèvecoeur defines American farmers as a "race of cultivators." To cultivate American land is literally a process of establishing a middle settlement on the one hand, and metaphorically that of improving one's moral condition on the other. The farmer should consciously curb his own destructive nature and endeavor to build a peaceful and spiritual existence. Crèvecoeur, moreover, emphasizes the importance of the farmer's principles of sobriety, honesty, and industry in his regeneration. Men without moral principles, on the contrary, degenerate into a bestial state of being. The farmer's principles are directly opposed to the "idleness" and "drunkenness" of a hunter or to the "dissipation" and "fraud" of a city-dweller. It is the farmer's dynamic interaction with nature, not a static one as Marx seems to suggest, that finally determines his regeneration in America.

Crèvecoeur's perception of reality, furthermore, is strongly attracted by such destructive human situations as wars, tyranny, and devasta-

tion. Even the representation of destructiveness in nature often becomes metaphorical for human situations. In *Letters*, therefore, human situations are not merely determined by natural reality, but actively involved in shaping it. What Crèvecoeur is chiefly concerned with in *Letters* is not the deterministic force of American land, but the philosophical speculation of man's regeneration and degeneration in his spiritual landscape.